

報告番号	※	第	号
------	---	---	---

主 論 文 の 要 旨

論文題目

絵ものがたりの形成と再創造

氏 名

末松 美咲

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、絵ものがたりが形成される過程と、その過程における物語再創造の方法について、テキストの分析／解釈に基づいて考察するものである。特に絵巻や絵本の形で伝わるお伽草子作品を対象として、先行作品や同時代資料をもとに各作品が内包する物語世界を読み解き、絵ものがたりを創造しようとする人々の営為を、テキストの内部から明らかにすることを目的とする。

お伽草子とは、室町時代を中心として、南北朝から江戸時代前期、十四世紀半ばから十七世紀後半の約三百年間に作られた短編の物語草子群のことである。今日知られるお伽草子は四百編を優に超え、現在でもあらたな伝本の発見は後を絶たない。こうした総数の多さは、お伽草子が物語文学だけではなく、先行するあらゆるジャンルの作品を引き、物語草子として仕立てたことに起因する。そのため、内容も王朝物語の貴族の恋愛物語を引き継ぐものから、武家物、庶民物、宗教物、異類物、異国物など、多種多様である。

一方で、お伽草子は非常に典型的でもあり、創作的な営みによる物語とは一線を画すものとして捉えられることがある。しかし、典型的な構造を持ちながら繰り返し読み継がれ、書き継がれて、現代に至るまで歴大な数のお伽草子が残されてきたのであり、少しずつ形を変えて繰り返し生産されるそのサイクルのなかに、あらたな物語を生み出さそうとする人々の創造的な営みがあったと言える。本論文は、このような視点から、お伽草子の創造性に焦点を当て、各テキスト間における差異を分析することによって、各作品が達成した固有の物語世界を読み解き、その創造性を積極的に評価しようとする。

まず第一部では、室町期における絵巻である『稚児今参り物語』を対象に、彩色絵巻、白描絵巻の特質と、テキストの書写活動から生まれる物語再創造の営みについて論じた。『稚児今参り物語』は、彩色絵巻、白描絵巻、奈良絵本という三つの形態で伝わる物語である。その内容は、稚児と姫君との恋愛を扱ったものであり、稚児と僧侶

との男色をテーマとする従来の「稚児物語」では否定される女性の存在を肯定的に描く。こうした点から、『稚児今参り物語』の書写・享受に女性の関与があったことが指摘されている。第一章では、この『稚児今参り物語』諸本のうち、細見実氏旧蔵彩色絵巻を取り上げ、天狗の描写に焦点を当て、彩色絵巻を構成する三つの要素である詞書き・挿絵・画中詞をあわせて分析した。その結果、『稚児今参り物語』が『七天狗絵』などの図様を踏襲し、天狗と僧侶とを表裏一体のものとして否定的に描いていることを明らかにした。さらに、尼天狗には乳母の活躍と重ねて描かれていることから、『稚児今参り物語』における当時の女性たちの男性社会へのまなざしについて論じた。そして、こうした物語世界が、詞書き・絵・画中詞が一体となり物語世界を構成する彩色絵巻においてこそ達成されるものであったことを指摘した。

続く第二章では、前章で取り上げた『稚児今参り物語』絵巻の新出本である甲子園学院蔵白描絵巻を取り上げ、旧細見本との本文の差異から、甲子園本があらたに王朝物語としての『稚児今参り物語』を創りあげていることを論じた。白描絵巻の詞書きには、彩色絵巻に比べ本文の増補がされている。その特徴としては、先行物語／古歌引用、和歌の挿入、草子地の挿入である。こうした白描絵巻における増補の特徴は、源氏物語に連なる系譜の王朝物語を形作るものである。白描絵巻の制作には、中世後期の女房文化との関わりが指摘されているが、甲子園学院本には、『稚児今参り物語』の伝承筆者として後土御門院勾当内侍の名が出ており、やはり女性による書写・享受が想定される。このような点から、白描絵巻における『稚児今参り物語』の再創造の背景として、王朝物語を享受し、書写した女性たちの存在について考察した。

続く第二部においては、お伽草子と先行説話、同時代物語との関係性に焦点を当て、物語が他作品とどのように関わりながら新たに成立するのか、イメージと物語の型という観点から論じた。

第三章では、渋川版二十三篇にも採られ、広く享受されたお伽草子『和泉式部』を取り上げ、先行作品における和泉式部のイメージが、『和泉式部』を形成する上で与えた影響と、そのイメージによって示される女人救済という主題について検討した。さらに諸本のうち、渋川版の元となった丹緑本の本文に注目し、語句の細かい改変によって、遊女としての式部像や、仏法による女人救済という主題が強調されていることを指摘した。

また第四章では、お伽草子『花みつ月みつ』を取り上げ、物語を成り立たせる物語の「型」と、物語の舞台である「場」との関係について考察した。『花みつ月みつ』は、書写山田教寺の稚児の身代わりの死を描く物語であるが、その物語の型は説経節『目連記』前段や、談義から派生した『源海上人伝記』と一致する。こうした語り物における物語の型を引き、書写山の稚児物語として草子化されたのが『花みつ月みつ』である。ここでは、『花みつ月みつ』のテキストとしての特質として、継母の讒言による兄弟、父子、師弟のすれ違いと複雑な心情表現を描いていることを示し、こうした物

語の複雑化が、語り物から物語草子化するに及んで可能になったものであろうことを述べた。

第三部では、奈良絵本を商品として扱った絵草子屋を取り上げ、近世前期における物語制作の方法について考察した。特に絵草子屋「小泉」の関与がうかがわれる奈良絵本『硯わり』を対象に、本文の検討と諸本の関係から、絵草子屋におけるあらたな絵ものがたり制作とその創造性について論じた。

これまで、『硯わり』の奈良絵本のうち、独自の本文を多く有する加藤家本系統の伝本は、加藤家蔵奈良絵本三冊しか知られていなかったが、近年、富山県高岡市の浄土真宗寺院である勝興寺に所蔵される奈良絵本が発見された。この奈良絵本は、下冊末尾に絵草子屋「小泉」の壺印が押されている。

第五章では、こうした近世前期における絵草子屋の存在を念頭に置きながら、加藤家本系統の本文を分析し、独自本文に注目して、その物語化の方法を探った。加藤家本『硯わり』は、『元亨釈書』を骨組みとしながら、『撰集抄』やその他の説話、エピソードを寄せ集めて作成されたものであるが、その「寄せ集め」によって全体が有機的に結び付き、物語の再創造がなされている。その物語化の方法からは、説話を単に引くだけでなく、意識的に配置し組み合わせ、あらたな物語を創出しようとする意図がみられる。ここでは、そうした物語化の過程を、近世前期における物語制作の一典型として示すことができると指摘した。

続く第六章では、勝興寺本と加藤家本の本文、挿絵、装丁を比較分析した上で、絵草子屋における奈良絵本制作についてを考察した。絵草子屋「小泉」の印記をもつ勝興寺本と加藤家本は、どちらも奈良絵本三冊の形態で伝わっている。この二本は、漢字仮名遣いの相違はあるものの、本文はほとんど同じであり、同じテキストを用いて制作された可能性がある。しかし、装丁を比較すると、勝興寺本が豪華本、加藤家本が量産型と、同じ絵草紙屋で制作されたものであるとは考えられない。一方で、挿絵の場面と構図からは、やはり勝興寺本との関係性が見いだせる。こうした点から、加藤家本は勝興寺本の制作に関わった「小泉」と関係の深い絵草子屋において制作され、絵草子間においてテキストが共有されていた可能性について示した。

この第六章を受けて、第七章では、勝興寺蔵『硯わり』を中心として、全く同じ印記を持つ奈良絵本『七草ひめ』と比較しながら、印記の種類、装丁、挿絵、本文制作の方法を分析し、絵草子屋「小泉」における物語制作について考察した。絵草子屋「小泉」は、調度品や贈答品ともなりうる豪華本を扱っていた絵草子屋であるが、そこでは商品としての体裁が決まっていたと考えられる。そうした奈良絵本の形態面に注目し、加藤家本系統における本文の増補との関係について述べた。近世前期における「説話の寄せ集め」における物語制作の方法は、物語内部だけでなく、本の「もの」としての外部の側面とも密接に関わっていたと考えられる。商品としての本の形態に合わせるかたちで、「説話の寄せ集め」が行われ、そのなかから、創造的な物語制作の営み

が生まれていた可能性を指摘した。

以上の構成により、本論文では、室町時代から江戸時代前期にかけて制作されたお伽草子の形成と再創造について、テキストを先行作品や同時代作品との関わりから分析し、その物語化の方法について論じた。本論文は、各テキストが持つ特質を明かとし、それぞれに達成される物語世界があることを示している。人々の物語創造の営みによる所産としての絵ものがたりについて、今後も範囲を拡げて考察していく必要がある。

